慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	識態と覺
Sub Title	
Author	横山, 松三郎(Yokoyama, Matsusaburo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1929
Jtitle	哲學 No.5 (1929. 2) ,p.33- 64
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000005-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

識態と覺

横山松三郎

一

心像によらずして思考することが可能であるか否かといふ問題が、實驗心理學に於て論爭の中點をなしてゐたのは、已に廿年も昔のことであるが、それは今以て尙好研究題目たるを失はない。といふのは、最近プラット[1]が指摘してゐるやうに、思考を構成する主たる內容—直接所與としての—が非具象的(unanschaulich)過程なることは一般の認むるところとなつて來たに拘らず、その本然の性質如何については未だ一致した意見を見出すことが出來ないからである。自分が玆にかのあまりにも多く論議された識態(Bewusstseinslagen)及び覺(Bewusstheiten)[2]を再び拉し來つて拙き考察を試みようとするのも、かゝる意味に於て强ち無益な勞作でもない

であらう。

二

周知の如く識態及び覺について創めて實驗的觀察をなしたるはキュルペの主宰せるヴュルツブルヒ學派であるが、感覺、心像及び感情の外に思考要素なるものが存在するといふ議論は彼等以前にも全く無かつたわけではない。已に千八百八十一年スペンサーは[3]その著「心理學原理」に於て精神が二種の全然相異れる要素、即ち、感情及び感情相互の關係とから成立つてゐることを主張してゐる。その說くところによれば感情は吾人の精神生活の大部分を占め、その各は皆それぞれ他と容易く區別し得る獨特な個性を有つてゐる。即ち、この感情なるものは今日の心理學に於ける感覺、心像及び感情等に該當するのである。之に反して、關係の意識は二個の顯著なる感情の連鎖をなすところの過渡的狀態であつて、究極的には一種の暫有的感情に還元せらるゝものである。然しそれは直接所與としては感情と明瞭に識別せらるゝ特徵を具備してゐるのであるから、獨立した心的要素と看做

さる可きであるといふのである。

ジェイムス[4]も亦千八百九十一年發行の「心理學原理」の「意識の流れ」なる章に於て「漠然たる(非感覺的)意識內容をば吾人の精神生活に於て當然占む可き地位に復位せしめなくてはならない」ことを力說してゐる。彼はいふ。

「讀者は何か云はふとする時の自分の意向が如何なる心的事實に屬するかを反省したことがないであらうか。それはすべての他の意向とは異る絕對に明確な意識狀態である。然もその幾部分が言葉や物の表象から成立つてゐるだらうか。殆ど零である。暫時の躊躇の後に言葉や物が心に浮んで來る。そして其時には最早この豫知的意向即ち先見は消失せてゐる。然しそれはそれ等の言葉の中單にそれに一致するもののみを受入れその正しきを認め然らざるものは拒否してその誤りなるを認む。されば意向は極て積極的な性質を有つてゐるといへやう。然もそれに置換へられるところの心的事實たる言葉によらずして吾人はそれについて何をいひ得るであらうか。それは單に(云々といはふとする意向)として命名されるに過ぎない。吾人の精神生活のたつぷり三分の一はかゝる分明ならざ

る暫有的先馳的意識の透視畫であることは何人も認むるところであらう。始めて見る文書を音讀する人がすべて高調すべき語はこれを正しく高調して讀み得るのは、彼が次に讀む文章の形について或る種の感—それは眼前の語の意識と結合して彼がその語を發音する時に適當なアクセントを附するやうに心の中で語勢を調節する—をもつてゐる爲であるといふのでないならば、果して如何なる理由によるのであらうか。この樣な高調は殆どすべて文法上の構造の然らしむるところである。例へば、"no more"といふ句を讀めば直に"than"を豫期し、"however"が文章の始めにあれば"yet,""still"或は"nevertheless"が豫想される。或る一定の位置にある名詞は或る特殊の動詞を要求し、他の位置に於ては關係代名詞を要求する。形容詞は名詞を、動詞は副詞を豫想せしむるといふやうに、例を擧げれば際限がない。而して次に來る文章の文法上の構造の豫知は順次に發音して行く語と結合して殆ど正確に作用する故、本の內容の意味を了解し得ない讀者さへ、恰もそれを了解してゐるかの如き微妙なる調子を以て音讀することが出來るのである。

或る學者は以上の事實をば次の樣に解釋するであらう。即ち、一定の表象が聯合の法則に從ひ高度の速力を以て他の表象を生起せしむる結果、それが實際に意識に上る前に已にその傾向を感じたのであると後から考へる樣な場合がそれである、と。この種の學派にとつては意識の唯一の內容は明確な性質を有する表象のみである。傾向の如きも存在はするが、それは體驗者の意識內容としてではなく寧ろ外部から觀る心理學者に對しての事實として存在するのである。かく傾向は心的には零である。單にその結果が感じられるだけである。

「偖、吾人が玆に主張し、且實例を堆積して證明しようと思ふことは實に之等の傾向なるものが單に外部的敍述の結果であるばかりではなく更に意識の流れそれ自體の對象の一部をなしそれによつて內部的に覺知せらるゝものであるといふことである」と。

かくしてジェイムス[5]は上記の如き漠然たる意識過程を(イ)過渡的意識狀態即ち關係意識と(ロ)傾向意識との二種に類別し、それぞれ例を擧げて說明してゐる。第一種には「然し」云々に「よつて」、「而して」、「若し」といふ樣な意味を表す意識狀態が屬し、第二

種には「待て」「傾聽け」或は「見よ」といはれた時の吾人の瞬間的意識狀態が包括される。

其他、コルキンズ[6]やスタウト等[7]も亦同樣な意見を發表してゐる。コルキンズはジェイムスの表に類似、差異、より多い或はより少い、及び單一等を意味する意識狀態を附加した。が大體に於て氏はジェイムス說を祖述してゐるに過ぎない。之に反してスタウトは前三者よりは遙に主知主義的傾向を表してゐる。彼は全然心像によらざる思考即ちデカルトの所謂純粹思考の可能なることを高調してゐるのである。

以上述べたところによつて非具象的心的過程の存在が已に十九世紀の末期に於て少くとも少數の學者間に認められてゐたことが明かになつたと思ふ。勿論彼等の說、相互の間には多少の逕庭が存する。然し、吾人の精神生活が從來の心的要素のみによつては滿足に說明されないといふことを認めてゐる點に於て彼等は一致してゐる。而してこの英米學者の說がその本國の實驗家によつて吟味されず却て思想的傳統を異にするヴュルツブルヒ學徒の研究によつて支持されたことは實に一つの奇緣ともいふべきである。自分は今ヴュルツブルヒ派の統領キュル

ペと前記四名の學者との學的關係を調査する餘裕を持つてゐない。されど千九百年以後のキュルペが已にヴントの羈絆を脱し、思想的にジェイムス、スタウト等と共鳴するブレンタノの影響の下にあつたことに想ひ到る時この奇縁が必ずしも偶然でなかつたことを知るのである。

三

抑々、識態といふ語はマイエル及びオウルト[8]が聯想過程の實驗に於て刺戟語の露出から反應語が發聲さるゝ迄の間に被驗者が經驗した一種の意識現象―それは明確なる表象としてもまた意志としても敍述し難い―を命名する爲めにマアベの提言に從て始めて採用したものである。マアベ[9]自身も亦その判斷作用の研究報告中に「細密にその特性を描出することの全く不可能な或は殆ど不可能な然も判明なる內容を有する意識上の事實」例へば疑問、困難、努力、肯定、確信等に於ける意識過程をば識態なる名目によつて包括した。マアベは識態の外に更に可感的要素に還元し得ない過程が判斷の知覺の內容をなしてゐることを指摘し、それを

Wissen(分つてゐるといふ意識)と呼んでゐるが、彼は識態についても亦このWissenについても何等積極的定義を下してゐない。

其後オウルト[10]は識態を、それ以上簡單な要素に分析し得ない意識の瞬間的Konstellationであるとし、ジェイムスの所謂心的暈彩(Psychic fringe)へフディングの熟知意識、ヴントの感情の一種等と同列に位す可きことを主張した。オウルトによれば識態には(イ)内省によつて單にその存在を指示し得るのみで、その委しき特性は全然決定し得ないものと(ロ)或點迄その特徴が決定さるゝものとの二種類ある。前者の例として彼は被驗者のキュルペが1000(千)から217(二百十七)を引く問題を課せられた時の内省報告を擧げてゐる。

「1000及び217を表す明瞭な視的表象―217は1000の下に書かれてあつた―が第一に經驗された。之等の表象は直に七百といふ言語をそして次に暫時の靜止の後に八十三といふ語を觸發した。この靜止の瞬間はそれ以上描敍することの出來ない一種異樣な識態によつて滿たされてゐた」。

更に後者には疑問、確實、肯定等を表す意識狀態が屬する。之等も亦具象的過程

とは全く異なる特殊の性質を有する意識過程である。而して假令吾々は最後の分析に於てそれ等が單に漠然とした表象であるに過ぎないといふことを發見したとしても、兎に角内省に直接與へられたまゝでは獨特なものであるから、特殊の名目によつて呼んで差支へないと論じてゐる。

マアベと殆ど同時に然も上述の獨逸心理學者とは全然獨立して高級な精神作用の研究に着手したのは佛のビネエである。[11] 彼は自身の二人の女兒を被驗者として質問法によつて實驗したのであるが、複雜なる思考過程は視的心像、内部言語運動或はそれ等の複合體としては完全に説明し得ないといふ結論に達した。その被驗者の一人は思考を言語で表明することは不可能でないが、その内容を如實に描き出すことは絶對に不可能であると報告してゐる。ビネエによれば吾々は思考を意識的に表現する爲に心像を用ひることは出來る、然しその樣な場合心像は單に一個の任意的表號として作用するのみで、その指示する意味は吾々が勝手に附加したものであるといふのである。

ビネエの結果はウッドウァースの支持するところとなつた。ウッドウァースは[12]有意的

運動の實驗に於て意識の內容が必しも表象を列擧することによつて敘述し盡されるものではないことを發見した。被驗者は視的心像にも運動心像にも、言語心像にも、または他の如何なる心像にもよらずして、今正に行はんとする運動を明瞭に認識したる場合を指摘してゐる。即ち運動の意識は注意の焦點にあり、十分に判明であるに拘らず何等の表象も伴つてゐない、よし伴つてゐたとしても內省によつて把捉されなかつたのである。また表象が明かに意識に含まれてゐた時でさへ、それは運動の認識とは同一でなかつたのである。運動は思考それ自體によつて認識される。思考に於ては表象は遇然的非本質的被覆に過ぎないのである。以上はウッドウァースの結論であるが、彼はまた他の實驗—(13)それは質問法によつて思考過程を研究したものであるが—に於ても思考が感覺的要素とは全く異る要素を含むことを認めたのである。彼の說によれば思考の要素は皆各々sui generisなものであつて赤や靑や甘味等と同樣に一個の獨立した性質であり、決して感覺の合成ではない。といつても、それは「作用」の範疇に屬す可きものではなく飽く迄內容の一部をなすのである。即ちあらゆる判斷作用、あらゆる推定作用に對して其

處には或る特殊のそして分析を許さない意識的momentが存する。而してそれは恰度他のすべての心的要素が再生するやうに再生するものである。

一方、マアベ、マイエル、オウルト等によつて開始された研究は其後アッハ、メッサー、ビューラーの如き勤勉なるヴュルツブルヒ學徒によつて繼續され擴張され、豐富なる成果を思考心理學に提供した。

アッハは[14]反應時法によつて有意的運動の分析を試みた。刺戟としては數字或は無意味の綴字等の記してある紙型が露出され被驗者はそれを單に意識するや否や或はその性質を十分に把捉するや否や直に電鍵を壓し然る後綿密に全體の意識過程について報告するやう命令されたのである。彼の主たる目的は思考の研究にあつたのではないが然も極めて暗示に富む資料を供給してゐる。蓋し彼の被驗者は指圖が與へられた時から刺戟が露出される迄の間即ち實驗の前期に於て、また或る場合には反應の直後即ち實驗の後期に於て複雜な意識內容が Wissen (分つてゐるといふ意識)として電光石火的に心に浮んで來ることを報告してゐるのである。アッハはそれを覺(Bewusstheit)と名づけた。彼はいふ。「實驗の終り即ち

後期の始まりに於て被驗者は屢々直前の經驗について不思議な知識をもつ場合がある。それは恰も全經驗が分化せざるまゝ同一瞬間に與へられたかの如き有樣である。一被驗者の報告によれば全體の過程が壓縮されいはゞ一束になつて與へられるといふのである」と。

アッハは之等の覺は再生傾向の不全興奮によると考へた。その重なる種類は(一)意味の覺―言葉の意味が心像によらずして意識される(二)關係の覺―現在浮かんでゐる觀念は自分が考へようとしたものと一致するといふ意識或は一致しないといふ意識(三)決定の覺―現在の意識過程が一定の目的或は暗示或は指圖によつて指導されてゐるといふ意識或はゐないといふ意識(四)傾向の覺―何等特定の方向も目標も表れてゐないが兎に角現在の意識過程は決定されてゐるといふ意識、例へば「口迄出かゝつてゐる」といふ樣な場合の意識等である。意味の覺は常に感覺或は心像によつて同伴されるか、でなければ先行される。而してそれ等は皆覺として瞬間的に心に浮ぶ非心像的內容を表象するところのものである。即ち意味內容の標號をなすものである。が然しそれは意味の覺知に必しもなくてはな

らないものではない。例へば再認作用に於て聯想された觀念は實際に意識に表れなくてもよい、即ち再生的傾向が十全なる働きをなさなくてもよい、その不全與奮だけで明確な一義的志向作用を起すに十分である。而してそれは覺として即ち意味として意識に上るのである。關係の覺はマアベの識態と同一のものであるとアッハはいつてゐる。その齎らす意味―その指示する關係―は過去の意識内容である(例―驚き、疑ひ、困惑等の意識)。

メッサーは[15]その「思考心理の實驗的研究」に於て聯想反應法、對比法等により極めて充實せる多數の内省報告を收獲した。その結果を總括すれば(一)刺戟語によつて觸發せらるゝ表象の完全の度と意味の一般性との間には反對の關係が存する事、(二)意味の把捉は心像によらざる事(彼は刺戟語の了解が明かに心像によるといふ例はその實驗に於ては見出されなかつたことを指摘してゐる)、(三)反應語が表象される前に已にその意味が意識される場合が屢々ある事、(四)心に浮んだ反應語が十分にそして正確に表明しようとする意味を表すことの出來ない場合がある事等が重なる事實として列擧される。而して以上の如き經驗内容はすべて識態に屬

す可きことをメッサーは認めた。

彼は之等の識態を二つの種類に區分した。言語と結合してその意味を表す識態「分つてゐる」「あやふや」「同じ意味だ」等の感)が第一種をなし第二種には言語は思付かないが自分の云はふとする事柄はよく知つてゐる樣な場合の識態が含まれる。これは更に小區分される。然し識態は本質として非具象的過程であるから純心理學的即ち現象的分類を許さない。そこでメッサーはそれ等を論理的に配列した。即ち(イ)思考の對象相互の關係を表示する實在、空間及び時間的屬性及び關係等の識態と、(ロ)思考の對象と主觀との關係を表示する「知つてゐる」「珍らしい」等の感及び價値の意識等に類別したのである。但し(イ)と(ロ)の間には確然たる差別は存しない、といふのは彼等は各單に發達過程に於ける一つの段階をなすに過ぎないからである。

更に識態はより知的なるものと、より感情的なものとに縱斷される。前者はアッハの意味の覺に相當し後者はその關係の覺に一致する、そして結局マアベ及びオウルト等の識態の範疇に入るのである。

最後にヴュルツブルヒ派の研究の中で最も多く論議され、そして最も多く批難された一實驗を擧げてこの紹介の項を閉ぢ度いと思ふ。

ビューラー[16]は質問法—例へばニィッチェのアフォリズムの一つが實驗者によつて音讀されると被驗者は直ぐそれに同意するか否かを答へ次にその全體の意識過程を報告するといふ樣な方法—によつて思考の本質を捉え樣とした。彼によれば思考には三種の過程が含まれる。(一)表象(二)感情及び識態(三)思考內容(Gedanke)等が即ちそれである。然しその最も重要なる項目は表象でもなくまた感情でもない。それは何等可感的性質もまたは可感的强度も有しない、然も明瞭に意識されるところのこの全く單純な第三の要素である。「被驗者はアッハに從て之等の項目をば覺と呼び或は知識內容と呼び或は單に云々の意識と呼んでゐるが、多くの場合そして最も正確に思考內容(Gedanke)と呼んでゐる。そしてこれこそ吾人の思考の本質的要素をなすものである」と彼はいつてゐる。

さればビューラーの達したる結論はビネェ及びウッドウァースと全く一致してゐるといへやう。而してその方法が互に相類似してゐることも注目に値する。

そは兎に角思考內容を以て思考過程の究極的單位として定義したる後ピューラーはその三つの類型を左の如く規定した。(一)規則の意識—課題を解決する方法の意識、(二)關係の意識—思考相互の關係或は同一思考に於ける部分間の關係の意識、(三)志向—意味の意識即ち對象への關係。

四

識態及び覺に關するヴュルツブルヒ學派及び其他の學者の實驗的結果は大體前章に於て述べた通りである。偖吾々はこれ等の現象的には極めて漠然とした然も機能的には十分明確なる意識過程を如何に解釋すべきであらうか。彼等は結局從來の可感的構成要素に還元せらるべき性質のものであらうか。或はまたピューラーやウッドウアースが主張する如く全く新しき一個の獨立的要素と看做さるべきであらうか。此問題の解決こそ本研究の主なる目的でなくてはならない。以下私はヴュルツブルヒ派に對する先人の批評を檢討しつゝ自らの說を展開して行かうと思ふ。

そこで先づ第一に方法の考察から始める。ヴントに[17]よれば質問法は嚴密な意味に於て實驗的方法といふことは出來ない。それは實驗者と被驗者の役割を演ずる二人の人間が參加するといふ點に於て外見上實驗法の體裁をなしてゐるが內省を統制する何等の條件をも具備してゐない全然非科學的方法であるといふのである。私の質問法に於ける經驗はこのヴントの見解の當否を判斷するにはあまりに貧弱ではあるが、然も私はビューラーやウッドウァース等によつて實際に適用された時、質問法が記述的心理學の要求する內省報告を收獲し得なかつた事實を知ることによつてこの方法に固有の缺陷なきやを疑ふのである。彼等の得たる內省報告なるものを吟味するに、一つとして經驗の內容を有りの儘に描敍したるはなく、すべてその內容の齎らす意味を陳述してゐるのである。殊にビューラーの實驗に參加したる被驗者の中にはキュルペを始めとして數人の內省に熟達せる心理學者がゐたに拘らず皆一樣に"stimulus error"を冒してゐるのは誠に意外である。この點について私は特に實例を擧げて證明する必要を感じない。たゞ、被驗者の一人であつたデュル[18]が實驗後の感想としてその內省報告が單に思考過程のい

はゞ間接的な言語的表現に過ぎない、そして若しそれが心理學的敍述であるならば心理學の門外漢が友人と意見を交換してゐる場合にはいつも內省報告をしてゐるといはねばならぬといつてゐることを述べれば十分であらう。

斯くの如く質問法によつては意識過程の現象的記述は望まれないのであるから、その結果に基いて新しき要素を定立しようとすることの如何に不合理であるかは論ずる迄もないことである。

然らば思考過程の研究は如何なる方法による可きであらうか。ヴントは[10]アッハやメッサー等の實驗についても亦辛辣なる批判を下してゐる。否、彼は思考過程の實驗の全然不可能なることを主張するのである。以下彼の論ずるところを抄譯する。

「ヴュルツブルヒ學徒が直接的に或は間接的に覺及び識態の概念を通して素朴的な思辨的心理學に復歸することは避く可からざるところである。彼等は比較的簡單な意識過程をさへ觀察することをせず、徒らに不定な表象に齷齪してゐる。家を建てるには屋根から始める可きでないといふ格言を彼等は無視してゐるの

である。其上彼等は實驗に過重の荷を負はしてゐる。實驗は簡單な心的過程及びその屬性を決定するには役立つが思考の生成過程を研究するには全然不向きである。それは單に曖昧な結果を齎らすに過ぎない。即ち實驗は常識的內省に墮す。而してそれに滿足し得ない故に論理的考察が行はれ、結局心理學には無意味な言語的遊戲にエネルギーを浪費することになる。思考の研究は民族心理學特に言語心理學によらねばならぬ」。

私は以上の如きヴントの說に同意しがたい。思考の言語心理學的研究が重要であるのは何人と雖も疑はないであらう。然し心理學の主要任務の一つが複雜なる意識過程を、より簡單なる過程に分析することである以上、思考に限らず如何なる精神現象の研究にも實驗の必要なることは認められるであらう。殊に發生的研究が實驗的條件の下に行はれ得るといふに於て、私は更にその必要を高調しなくてはならない。勿論アッハ等の方法に缺點あることは明かである。彼等が實驗の前期から後期にいたる迄の全部の心的過程を內省せしめたことは、他の場合には容易く分析し得る過程をも分析せざる儘に報告するが如き傾向を助勢せし

めたに違ひない。そして實際ヴントの批難もかういふところに存する。私としては全部的内省法の代りに部分的方法を用ひて前期、主期、後期の各に於ける經驗内容をば一つ一つ別々に徹底的に觀察せしむることのより優れるを信ずる。否理想的には、全部法と部分法とを併用し互に相統制せしむ可きである。然し乍ら未踏の處女地の探求に於てはその豫備行爲として全部法のみを使用することもまた必要であらう。蓋し、それによつて當面の研究對象についての大體の概念を把捉する事が出來るからである。かくヴュッブルヒ派の研究が思考過程の見取圖の描出に對する努力と見る時に吾々はその raison d'être を認めそしてその價値を評價することが出來るのである。

方法の論議は以上で打切り、次に彼等の得たる結果の解釋に移らう。がその前に思考についてのヴントの觀察を一瞥する。已に述べたる如くヴント[20]は質問法に對して痛烈なる批評を下してゐるが然も自分は何等統制なき常識的方法によつて思考をその自然的進行に於て捉えようとした。彼によれば思考は言語的表現の過程に於ては形成されず却つて最初の言語が心に浮んで來る前に已に全體

として意識に現出するのである。言語表象或は其他の表象は始めは意識の中心になく、思考が進行するにつれて漸次機起的に表れて來るのであるといふのである。吾々はこれによつてヴントが無表象の思考の可能性を認めてゐると看做してよいかといふに必しもさうではない。思考が表面單原的性質のものの樣に見ゆるのは吾々の注意に制限があつて一瞬の裡にそれを委しく觀察し得ない爲である。之に反して思考は恰度全體感情(Totalgefühl)が簡單感情の複合體であると同じ樣に、多數の表象から構成されてゐるのであると彼は主張する。私はヴントのこの結論の當否を論じようとはしない。何者、彼は觀察の領域を越えて獨斷の世界に逃避してしまつたからである。要するに當面の問題に對してはヴントからは何等の光明をも得られないといへよう。

此處に於て私は記述的心理學の重鎭ティチナー[21]の說を吟味しなくてはならない。ティチナーはヴュルツブルヒ學徒[22]の實驗的結果の整理方法が、非心理學的なることを指摘してゐる。特に彼はメッサーが識態を分類するに當つてその內容の性質如何を顧みず單にその表現する意味の同異によつたことを强く批難してゐる。然し

若しメッサーがいふ如く識態には何等判明なる感覺的成分が含まれてゐないとするならば、その意味即ちその志向する對象によらずして如何にしてそを類別することが出來ようか。恐らく識態や覺の多くは已にクラーク[23]がティチナーの研究室に於て實證せる如く運動感覺及び有機感覺に分析せらるゝであらう。されど、それ等が果して現象的に即ち內容の形態によつて區別され、そして記述的心理學の概念によつて分類され得るかは疑はしい次第である。ティチナー[24]は云ふ。「識態が一種の(非感覺的非心像的)聯合の形式を有つてゐると考へる學者は思辨的心理學に墮するものとみられる。彼等は論理的要求を心理的事實に置換へる。識態の齎らす意味が恒常なるが故にその媒介者たる內容も亦常に同一でなくてはならないと彼等は推定するのである」と。然し斯くの如き言明は他面に於て識態が假令感覺的要素から組成されてゐるとしても現象的には分類することは出來ないといふことを告白したも同然である。何者、それは意味の媒介者たる心的過程の形態の差異は必しも意味の差異を來さない、そして結局一つの意味は無數の異なる形態によつて表現せられるといふことを暗示してゐるからである。而して若し

この私の解釋が正しいならば、如何にして記述的心理學は識態及び覺を說明し、その體系に於てそれ等が當然占む可き地位を確定し得ようか。ティチナー[25]はこの難問に答へる爲にかの有名な意味の文脈說を樹て、文脈が習慣及び練習によつて次第に減衰するも尙最初の意味を支持することを論じた。以下少しく彼の說に傾聽しよう。

記述的心理學の見地からいへば、苟も意識的に表現せらるゝ限り意味は常に文脈(context)である。一つの表象が他の表象の文脈ならば、そは後者の意味となる。然らば文脈とは何ぞや。それは一定の境遇(situation)に於て有機體が意識の中心にもつところの表象に對して同時的に或は繼時的に附加された第二の心的過程を指すのである。本來境遇は外部的(物理的)であり、意味は運動感覺である。有機體はその直面せる境遇に對して何等かの身體的態度をとる。而してその態度から生ずる特殊の感覺が意識の焦點をなすところの心的過程に意味を與へる、即ちそれの意味をなすのである。然し吾々人間に於て、境遇は外部的でもあり得るし、また內部的でもあり得る、即ち多數の表象から成立つてゐる場合もある。更にま

た吾々人間は感覺の外に心像を有つてゐるから、意味は心像によつても代表される。故に境遇の如何によつて文脈は感覺的或は心像的形式をとることが出來るのである。

然し文脈の種々なる形式の中で運動感覺及び言語心像が最も重要のやうである。吾々は凡て動物である—運動する有機體である。それ故に運動的態度即ち實行的注意が絶えず吾々の經驗に起る筈である。そしてそれは推敲的注意より發生的には遙かに古い形式であるから、より根强く吾々の精神に喰ひ入つてゐる。故にある特定の素質をもつてゐる人々に於て凡ての非言語的意識的意味が運動感覺或は運動心像によつて媒介されることが發見されても必しも驚くに足らない。而して言語それ自體も亦最初は運動的態度であり、身振りであり、運動的文脈であつたのである。勿論音響との結合によつて複雜化されてゐる結果他の形式の注意即ち受容的注意及び推敲的注意の活動を補助するに適してゐるが、然も本質的には原始的注意の態度と同一性質のものである。かく言語が本源的に文脈的であり、然も音としてまた後には視覺として內容的性質をもつてゐるといふこ

とは言語が思考の媒介物として特に卓越せる地位を占めてゐる所以である。即ち言語は同時に表象であり意味である。而して豊富なる遊離的心像の供給をもつに從ひそして推敲的態度がより自然的になるに從ひ文脈としての言語の使用は益々習慣的となる。かくして印刷された文字の意味は今や内部的言語運動に伴ふ聽覺―運動的過程によつて表現される樣になる。即ち言語は言語それ自身の意味となるのである。また視覺的或は聽覺―運動的或は視覺―運動的表象は非言語的感覺或は心像の複合體に意味を與へることが出來る。更に或種の人々に於て凡ての意識的意味が運動的態度または言語によつて媒介されることも驚くに足らない。實際意味はあらゆる種類の感覺及び心像によつて媒介される。蓋し人間の精神的素質には甚しい個人差があり、且同一の人間の反應も事情の如何によつて變化するからである。

然し意味は必しも意識的内容をもつとは限らない。純粹の生理的過程によつて意味が媒介されることも有り得る。例へば急速力を以て文書に目を通す場合或は熟練せる樂士が一つの作曲を演奏する場合、意味が必ず意識的に表現される

とは考へられない。勿論其處には課問(Aufgabe)が作用してゐる。然しそれも意識されてゐなくともよいのである。茲に吾々は一個の普遍的法則を發見する。即ちすべての意識的內容は有機體の成長と共に或は複雜になり或は單純になり或は豐富になり或は貧弱になる、そしてその限界に於て最初極めて充實した經驗も終には漠然たる或は無內容の經驗に化するのである。吾人の外國語の學習過程はよくその間の消息を傳へる。學習の當初吾々は非常な苦心をする。凡ての新しい單語或は文章の意味は複雜な意識內容をもつ。然し熟達するや、これ等の文脈は消滅して全然無意識的に單なる神經の調整—生理的態度—だけで意味は體得されるのである。

ティチナーの說を展開して行けば識態及び覺は明瞭なる心像による思考からやや漠然たる心像による思考を通して全然或は殆ど無心像の思考にいたる迄の發達段階に於ける上限をなすことになる。思考は練習によつて機械化される、と同時にその內容をなす處の意識過程も亦次第に減衰し、終にその極限に達せんとする頃には單にその痕跡を止むるに過ぎない。而してこの微弱なる意識の痕跡こ

そ、ヴュルツブルヒ學派のとつて以て不注意にも新しき要素と呼ぶところのものである。

私は自身の實驗[26]によつて意味が感覺、心像等の過程によつて表現されることを知る。また或場合には無意識的に即ち單なる身體的態度によつて意味が會得されることをも知る。勿論、ティチナーがいふ樣に練習が常に思考を機械的にするとは考へてゐない。蓋し練習は必しも同一の反應の反覆を意味する譯ではなく、多くの場合雜多な試行的反應に始まり選擇、廢棄の過程を經て漸次熟練の域に導くのであるからである。然し思考が習慣によつて機械化される場合も少くない。故に識態及び覺をかゝる場合の上限であると看做しても一向差支ないことであると思ふ。而して同一の意味の媒介者としての多數の異なる意識の形態は皆各々思考の發達過程に於ける一つの段階であると觀る時私は始めて意味を現象的に分類することの必しも不可能でないことに想到するのである。

然らばティチナーの說に從て識態及び覺を可感的心的要素に還元することによつて吾々の問題は滿足に解決されたといへようか。私の觀るところによれば、ティ

チナーの學說は單にその記述的方面を解決したに過ぎない。其處にはより根源的な問題が殘されてゐるやうにみえる。即ち、最も熟練せる心理學者の內省が辛うじてその存在を指摘し得るに過ぎない處のかの微弱なる意識の閃光が如何にして明確なる意味を表現し得るか。また媒介者たる心的過程が變化減衰するも意味は同一であるといふのは如何なる理由によるのであらうか。かゝる疑問に直面する時私は記述的概念が全然無力なることを痛感する。そして心的要素の外に更に機能或は作用の概念が必然的に要求さるゝことを認むるのである。何者、精神がその本然の性質として志向的作用をもつてゐないならば、その對象を有意味のものとして把捉することは不可能であるからである。のみならず意味を思考作用の結果とみることによつてのみ、その恒常性を理解することが出來るのである。即ち同一の作用が繰り返さるゝ限り意味はその意識內容の如何に拘らず同一を保つものであると解釋するのである。

私はジェイムス[27]と共に意識を時間的に推移する流動と觀る。然しそれは何等起伏なき平滑なる不斷の連續ではなく、寧ろ幾多の波動の繼起である。その橫斷面

は所謂現象の世界である。そしてそれは無數の屬性のKonstellationとして記述的心理學の概念によつて説明される。然しその縱斷面を構成する波動の各々は一個のclosed systemとして心的作用によつて規定せらるゝものと考へるのである。これは私の獨斷であらうか。心的過程が內省によつて內容と作用とに直接區分されるといふことは敢て「作用學派」の説に俟つ迄もない。コフカ[28]がクラーク[29]の實驗(承前)を批評して「これ等の(思考の內容としてクラークが發見したる)感覺的內容は思考には何等關係のないものであるかも知れない、或は思考の必然的條件となるものかも知れない、或は思考そのものであるかも知れない」といつてゐるのに對してコムストック[30]は鑑定實驗をなしたる結果、如何なる思考に於ても思考そのものに無關係なる心像はない、全ての心像は思考に機能的關連をもつと論じてゐるが、これこそ思考の志向性を立證するものと私は考へるのである。而してそれは明かに心的現象の特徵は對象への關指にありと主張したブレンタノの説を裏書するものである。

そこで若し私の説く處が誤りでないとするならば私はビューラーの質問法に對

する自分の批評を修正しなくてはならない。何者、彼の被驗者は"stimulus error"を冒したことによつて思考に含まれた意識內容を分析することに失敗はしたが兎に角思考に於て最も本質的な志向作用について報告することが出來たからである――私は"stimulus error"の態度を以て作用を把捉する方法と考へてゐる。而してこの志向的作用は內容によつて分類せらる可きであると同時にその對象への關指の形式によつて分類せらる可きではないであらうか。ピューラーやウッドウァースの誤謬はこの志向性を內容と看做し、他の心的要素と同列の地位におき、そしてそれを思考要素と呼んだ點にある。

註

一、C. C. Pratt, Psychological Bulletin, 1928, 25, 550 ff.

二、高橋穣君の譯語による。心理學、第六十一版、第百五十五――百五十六頁

三、H. Spencer, Principles of Psychology, 1881, I, part ii, Chapter ii, § 65. 筆者は不幸にして千八百五十五年版を見る機會をもたなかつた。

四、W. James, Principles of Psychology, 1891, I, 253-254.

五、Ibid., 245, 250.

六・ M. W. Calkins, Introduction to Psychology, 1901, 128-136.

七・ G. F. Stout, Analytic Psychology, 1896, I, 85 f.

八・ A. Mayer u. J. Orth, Zeits. f. Psychol. u. Physiol. d. Sinnesorg., 1901, 26, 1ff.

九・ K. Marbe, Experimentell-psychologische Untersuchungen über das Urteil, eine Einleitung in die Logik, 1901.

一〇・ J. Orth, Gefühl und Bewusstseinslage, 1903.

一一・ A. Binet, L' Étude experimentale de l' intelligence, 1903.

一二・ R. S. Woodworth, Studies in Philosophy and Psychology, 1906, 351-393.

一三・ R. S. Woodworth, Essays Philosophical and Psychological, 1908, 485-507.

一四・ N. Ach, Ueber die Willenstätigkeit und das Denken, 1905.

一五・ A. Messer, Arch. f. d. ges. Psychol., 1906, 8, 6ff.

一六・ K. Bühler, Arch. f. d. ges. Psychol., 1907, 9, 297ff

一七・ W. Wundt, Psychol. Stud., 1907, 3, 302ff.

一八・ E. Dürr, Zeits. f. Psychol., 1908, 49, 315.

一九・ W. Wundt, Grundzüge der Physiologischen Psychologie, 6te Aufl., 1911, III, 552ff.

二〇・ op. cit. (一七)

二一・ E. B. Titchener, Lectures on the Psychology of the Thought-Processes, 1909.

二二・ Ibid., 110.

二三、H. M. Clarke, Amer. Jour. Psychol., 1911, 22, 214ff.

二四、E. B. Titchener, Text-book of Psychology, 1910, 518.

二五、Ibid., 367ff; Thought-Processes, 175ff.

二六、M. Yokoyama, Amer. Jour. Psychol., 1921, 32, 357ff.; 哲學第一輯百八十九以下

二七、op. cit., chap. IX.

二八、K. Koffka, Zeits. f. Psychol., 1912, 63, 219.

二九、C. Comstock, Amer. Jour. Psychol., 1921, 32, 196ff.

三〇、F. Brentano, Psycholgie vom empirischen Standpunkte, 1874, I, 115f.

（マイエル及びオウルト、マアベ、及びデュルに關しては全然ティチナーの思考心理學によつた）